

第 50 回音楽情報科学研究会参加報告

- 東大嵯峨山研の発表について

東大嵯峨山研から自動採譜の関連研究が 2 件発表された。質疑の時間に嵯峨山先生からフロアに向けて逆質問があった！200Hz, 400Hz, 600Hz の周波数成分を持つ音は 200Hz に聞こえるが、これに極めてパワーの小さい 100Hz 成分を加えると 100Hz の音に聞こえる。この 100Hz のパワーの境界線はどこにあるのか」「複合音の周波数成分の正数倍の関係をどの程度崩すと 1 つの音に聞こえなくなるのか」などの人間の感じるピッチに関するものだった。これらに対して、片寄さん（関学大）、柏野さん（NTT）、長嶋さん（SUAC）らによってさまざまな議論がなされた。

- テーマセッション「Rencon」について

今回の研究会のテーマセッションでは、Rencon のテーマセッションが組まれていたが、結局すべての発表が Rencon 主催者側からの発表だった。Rencon の研究がなかなか広がっていないことが伺える。

- 平田さん（NTT）の特別講演について

今回の研究会では、音情研 10 周年企画の一環として平田さんによる特別講演がなされた。印象的だった事柄を以下にまとめる：

- プロとマニアとアマチュア——音楽には、データベースやアルゴリズムなどの他分野と異なり、「マニア」が存在する。「マニア」の存在は、音楽情報処理研究にとってプラスにもなりうるし、マイナスにもなりうる。すなわち「マニア」は自分の持っている高度な知識や技術を駆使して素晴らしい仕事をする可能性もあるが、極めて視野の狭い研究になりかねない危険を持っている。
- 「なんたいそう」——これは「なんとなく・したい・やりたい・おもしろそう」のことだそうである。音楽情報処理研究ではこのような研究が少なくない。これは、音楽情報処理という分野で「まとも」な研究をするための指導体制、カリキュラムが十分に整備されていないことその他に、音楽が本来趣味の分野であったために広い視野を持たない人が多いことも考えられる。

- パネルディスカッションについて

音情研 10 周年企画のもうひとつがパネルディスカッションである。小坂さん（東京電機大）、長嶋さん（SUAC）らがこれからの音情研について議論した。以前から言われているように、研究者・技術者サイドと音楽家サイドの温度差が、ここでも問題視された。